E 暴力を伴うスポーツ指導の経験と意識

明治大学　政治経済学部
准教授
高峰　修

はじめに

今回の調査では、スポーツ指導に伴う暴力に関する項目として以下の2点について質問した。

A）学校内外を問わず、過去に受けたスポーツ指導において、運動部活動の顧問教員を含めて指導者から暴力[注1]を受けたことがあるか（素手で殴られる、蹴られる、物を投げつけられる、物で殴られる、暴言を言われる、懲罰的な練習をさせられる、の6つの言動）。

B）「Aで質問した6つの言動は、スポーツ指導として場合によっては必要である」という意見についてどう思うか（「賛成」と「反対」を両極とする5段階評価）。

日本人の体罰に対する意識については岩井（2003、2010）の先行研究があるが、そこでは家庭や学校教育場面における親や教師による体罰への意識について報告している。他方、体育やスポーツについても体罰経験やそれに対する意見が報告されているが、そうした報告の調査対象のほとんどは部活や体育会に所属する中・高・大学生、あるいはスポーツの指導者である。今回のスポーツライフに関する調査2014は、スポーツの指導場面における暴力に関して、幅広く成人の経験や意識について質問し把握したという点に特徴をもつ。

E-1 スポーツ活動において暴力的指導を受けた経験

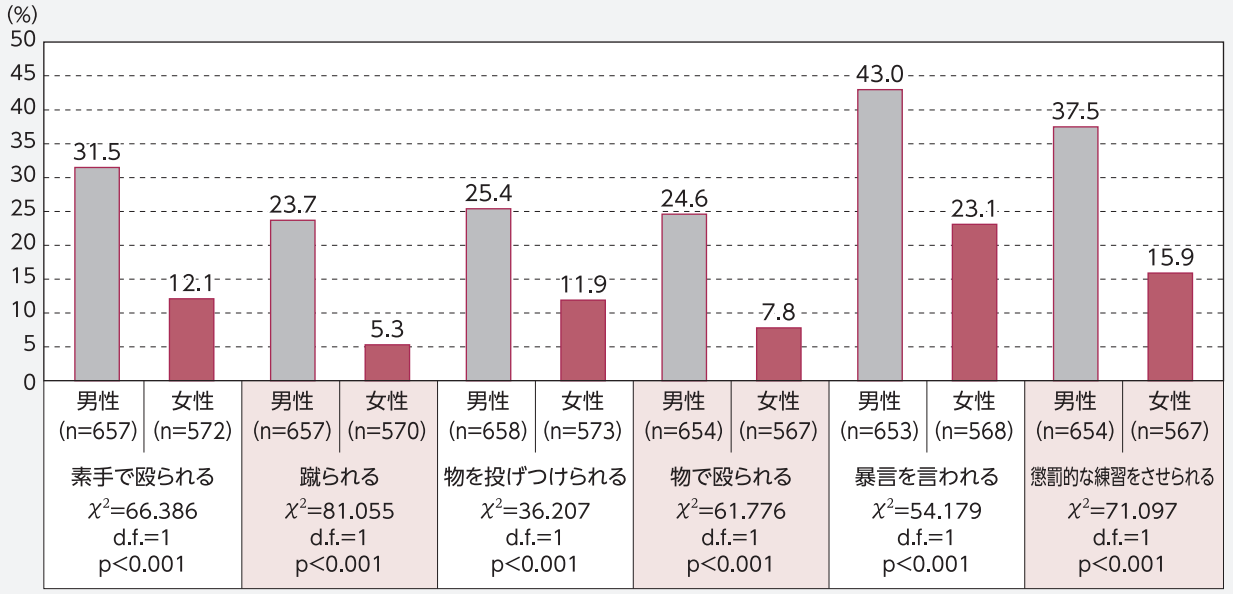
図E-1には、学校時代に行っていたスポーツ活動において指導者から受けた暴力経験を男女別で示した。全体的な傾向として、6つの言動すべてにおいて、経験した人の割合は女性よりも男性が高く、男性は女性と比べて指導者から暴力的言動を受けていた割合が高かった。

6つの言動の種類別にみると、経験した割合が最も高いのは、男性では「暴言を言われる」（43.0%）であり、「懲罰的な練習をさせられる」と「素手で殴られる」が30%以上の割合で続いた。またこうした順位は女性においても共通している。「蹴られる」「物を投げつけられる」「物で殴られる」といった身体的暴力は、経験率の順位としては下位に位置するが、男性の25%前後、つまり4人に1人はこうした行為をスポーツ指導の中で経験している。

図E-2には、暴力的言動を受けた経験について年齢層別で示した。6つの言動に共通する傾向として、暴力的言動を受けた経験は35~49歳の年齢層において最も高く、20~34歳、50~64歳が続き、65歳以上の経験率が最も低かった。岩井は2000年と2001年に行われた日本版総合的社会調査の調査項目「暴力を受けた経験」[注2]について分析している（岩井、2003）。同調査では最も低い年齢層である18~34歳で最も高い経験率を示し、35~49歳、50~65歳、65~89歳と年齢層が高くなるに

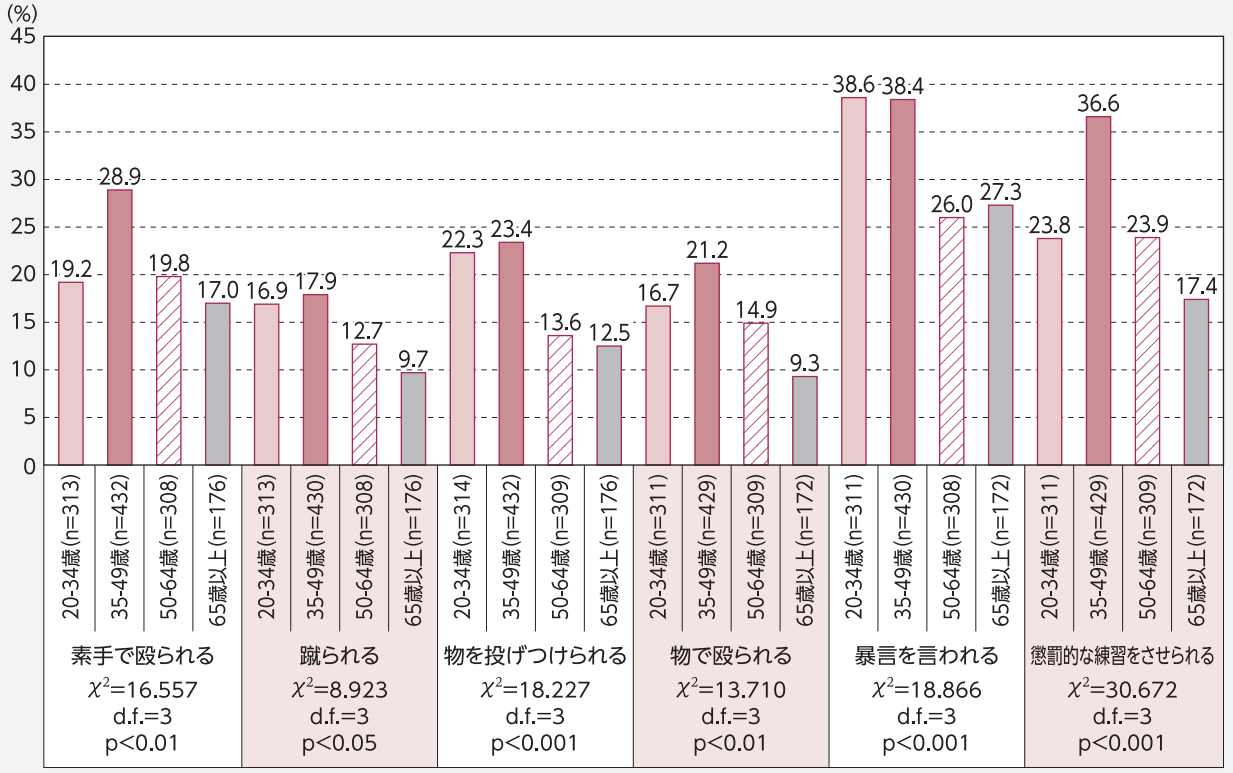
つれて、暴力的言動を経験した割合は低くなる。この結果と比べると、スポーツの指導場面を想定した本調査の結果は、特に35歳以上の年齢層において岩井（2003）の報告と同様の傾向を示していることになる。

6つの言動の種類別にみると、「暴言を言われる」「懲戒的な練習をさせられる」「素手で殴られる」といった経験をしている割合が相対的に高い。



【図E-1】学校時代のスポーツ指導者からの被暴力経験（性別）

資料：笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2014



【図E-2】学校時代のスポーツ指導者からの被暴力経験（年齢層別）

資料：笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2014

E-2 スポーツ指導における暴力的指導に対する意見

前述のように、家庭や学校教育場面における親や教師による体罰への意識については岩井（2003、2010）が報告している。その結果と、スポーツ指導に伴う暴力的行為について質問した本調査の結果を**図E-3**に示した[注3]。

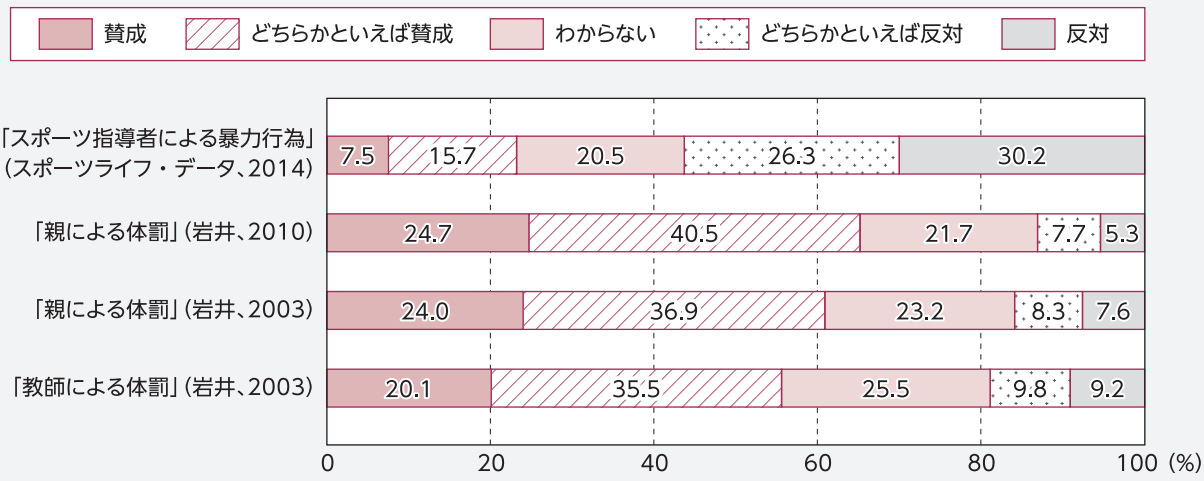
まず先行研究の結果をまとめると、親あるいは教師による体罰については賛成する意見（賛成+どちらかといえば賛成）が過半数を占めており、反対意見（どちらかといえば反対+反対）は20%を下回っている。2003年の報告で親と教師の体罰に対する意見を比べると、教師よりも親の体罰を許容する傾向が強い。また親の体罰について2003年と2010年の報告を比べると、賛成派が増加する傾向を示している。

さて、スポーツの指導場面に限定した本調査の結果をみると、岩井の報告で過半数を占めていた賛成派は23.2%（賛成7.5%、どちらかといえば賛成15.7%）にとどまり、反対派が56.5%を占め、まったく反対の傾向を示している。こうした傾向については以下のような解釈ができるだろう。

まず、日本の体育・スポーツ界では2012年秋から2013年冬にかけて指導に伴う暴力行為の問題が表面化した。**図E-3**の結果には、こうした社会の動向が反映しており、社会全体の体罰や暴力に対する意識が大きく変わった可能性がある。あるいは、もともとスポーツの指導における暴力的な言動には反対する傾向があったという可能性も考えられる。いずれにせよ、前述のように幅広い社会人を対象としたスポーツ場面の暴力的言動についての意識データが不足しているため、現時点での判断は難しい。

さて、全体としてはスポーツ指導に伴う暴力的言動に反対する傾向が強いという本調査の結果を、さらに男女別、年齢層別に示した（**図E-4**、**図E-5**）。男女別のクロス集計において、分布の偏りは有意であった（χ^2=69.683、d.f.=4, p<0.001）。男性において反対派は50%にとどまるが、女性では63%を占めており、女性においてより強く暴力的言動を否定する傾向が確認できる。こうした傾向は、親や教師による体罰の意識を扱った岩井（2003）の報告と類似している。

他方、年齢層に関しては岩井（2003）によれば、若い年齢層ほど体罰に反対する傾向がある。本調査における年齢層のクロス集計の結果は分布に有意な偏りがあるこ

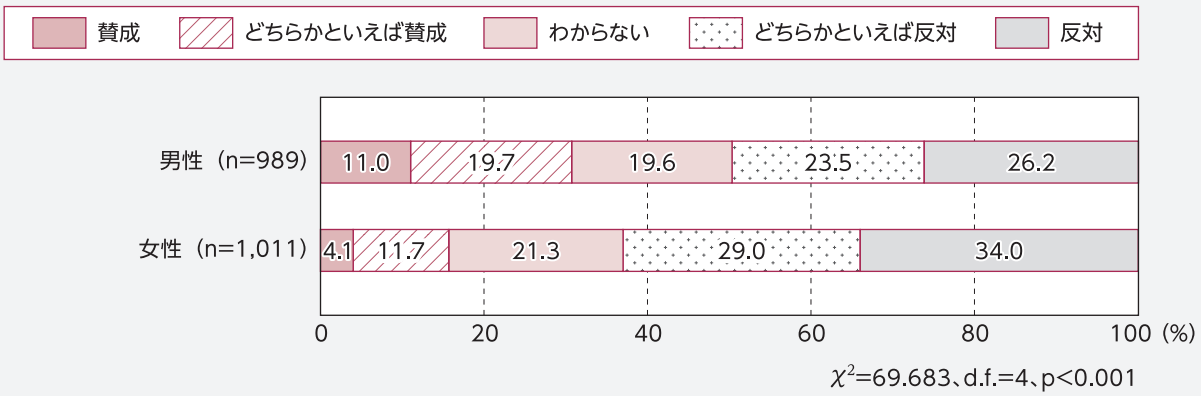


【図E-3】「体罰や暴力行為に対する意見」に関する先行研究との比較

資料：笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2014

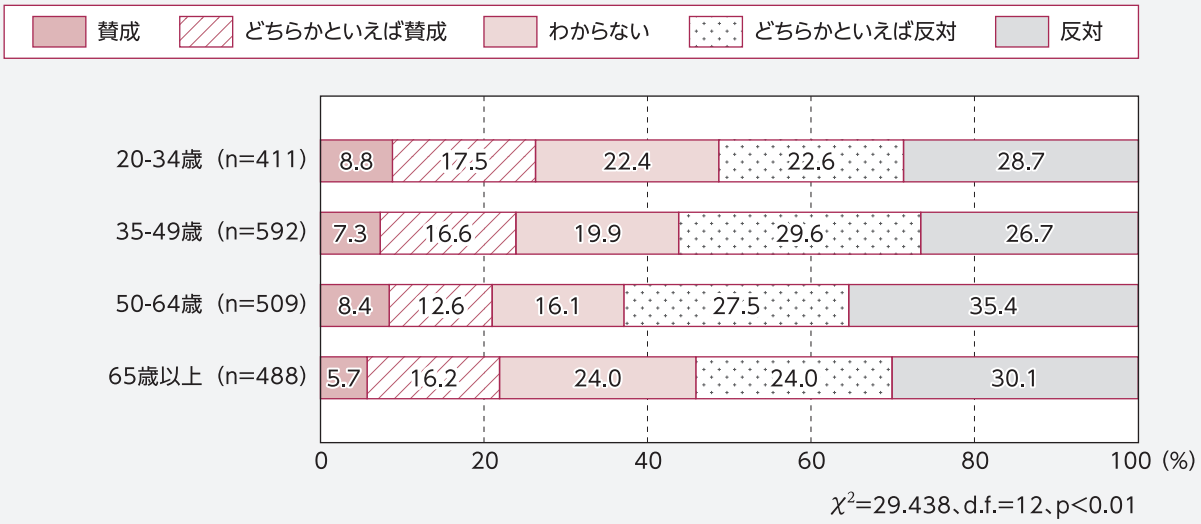
とを示してはいるものの（χ^2=29.438, d.f.=12, p<0.01）、必ずしも若い年齢層が暴力的言動に反対しているとは判断できない。また残差分析の結果として分布が有意に偏ったのは35~49歳の「どちらかといえば反対」、50~64歳の「反対」、65歳以上の「わからない」であり、年齢層の高低との一貫した関わりはみられない。この点にも、スポーツ指導における暴力行為に関する意見の特徴があると思われる。

性別と年齢層の変数以外にも、最終学歴、世帯年収、学生時代にスポーツの指導を受けた経験、スポーツクラブ加入状況、スポーツ指導をした経験との関連を確認したところ、暴力的言動に対する意見は、最終学歴、学生時代にスポーツの指導を受けた経験、スポーツクラブ加入状況と有意な関わりをもつことを確認できた。岩井（2003）は最終学歴について、高学歴であるほど体罰を否定するという傾向を報告しているが、本調査の結果もそうした傾向を支持するものであった。また学生時代に指導者からスポーツ指導を受けたことがある者、現在何らかのスポーツクラブに加入している者は、スポーツ指導における暴力的行為を肯定する傾向がみられた。



【図E-4】スポーツ指導に伴う暴力行為に対する意見（性別）

資料：笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2014



【図E-5】スポーツ指導に伴う暴力行為に対する意見（年齢層別）

資料：笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2014

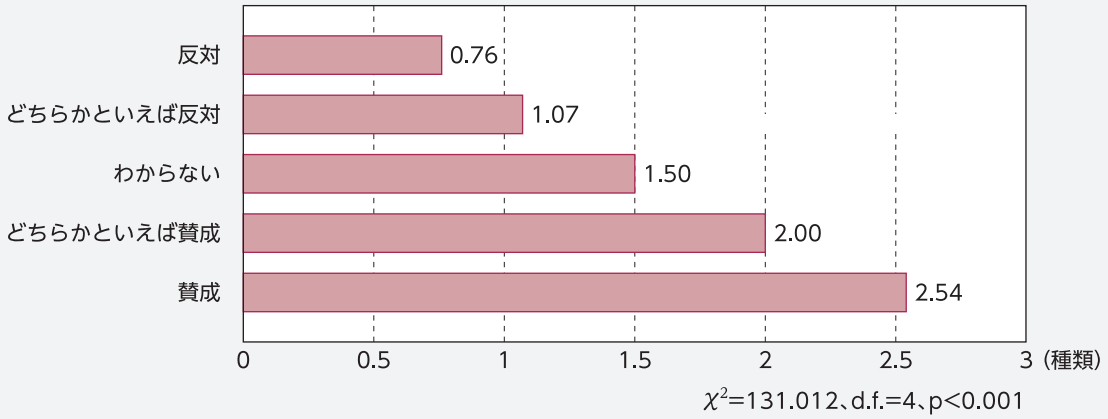
E-3 スポーツ指導における暴力的言動に関する経験と意見の関係

最後に、スポーツ指導における指導者による暴力的言動の経験とそれに対する意見の関係について検討する。まずは暴力的言動に対する意見と、6つの暴力的言動の経験のクロス集計をそれぞれ行ったところ、いずれも分布には有意な偏りが認められ、暴力的言動を受けた経験がある者ほど賛成する傾向がみられた。

次に、指導者による6つの言動を経験した種類の数を算出し、Kruskal Wallis検定を用いて5段階で評価した意見の各カテゴリーにおける平均の差の検定を行った（**図E-6**）。

図E-6の横軸は6つの言動のうち経験したことがある言動の種類の数を示しており、それぞれの言動をどれくらいの頻度で、あるいは深刻さをもって経験したかについてはわからない。このことを前提とすると、スポーツ指導に伴う暴力行為の経験と意見とは直線的な関係にあることがわかる。具体的には、暴力的言動に賛成するものは多種類の暴力的言動を経験したと報告しており、反対する者が経験した暴力的言動の種類は相対的に少ない。

これまで、暴力行為を受けた経験とそうした行為を肯定する意見は関連しており、そのような関連をもって「暴力は連鎖する」可能性が指摘されてきた。本調査の結果も基本的にはそうした先行研究の結果を支持している。さらに量的な側面、つまり経験した暴力的言動の種類が多いほど、それらの行為を肯定する傾向が強まるという点においても、両者の関連が強いことを示している。



【図E-6】「スポーツ指導に伴う暴力行為に対する意見」別にみた暴力行為経験種類の数の平均

注）グラフの数値は算術平均、検定はKruskal Wallis検定による。

資料：笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2014

注1）質問項目としては身体的暴力行為に加えて暴言、あるいは懲戒的な指導を含んでいるが、本稿における表記としては「暴力」で統一した。また本稿では、先行研究において使われた部分以外では、あえて「体罰」という用語を使用していない。

注2）質問項目は「あなたは、殴られたり暴行を受けた経験がありますか」であり、選択肢は「はい」と「いいえ」の二択である。ちなみにこの質問項目はスポーツ活動に限らず社会生活全般における暴力経験について質問しているが、その期間などについては制限していない。

注3）岩井（2003、2010）では5段階の中央に「どちらともいえない」を設定していたが、本調査では「わからない」を用いた。本稿ではこれらを同一の回答として扱っている。

<参考文献>

岩井八郎（2003）「経験の連鎖ーJGSS-2000/2001による『体罰』に対する意識の分析ー」JGSS研究論文集2：113-125.

岩井八郎（2010）「容認される『親による体罰』ーJGSS-2008による『体罰』に対する意識の分析ー」日本版総合的社会調査共同研究拠点研究論文集10（JGSS Research Series No.7）、：49-59.